

03・夜中、民宿の部屋にふたりきり

『02・ご挨拶』から数時間後。

とある年の夏。七月二十七日（月）二十一時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十四度程度。

涼しく、心地よい夏の夜。

場所は、民宿内、現在主人公が自室として使っている部屋。

ここは本来宿泊用なのだが、伯父と伯母が、主人公が自分達に気を遣いすぎないよう、

また、ある程度ここで自由に生活できるよう、特別に使わせてくれているのだ。

信じられないほどにいい人達である。

主人公はそんな二人の優しさをかみしめつつ、滞在中プライバシーを確保してもらえて  
いる喜びに包まれて、布団の上で一人読書をしている。

夕飯後は、もう就寝まで一人で過ごせるのでありがたい。

というか、さつきだつて、帰宅の挨拶をするのが恥ずかしいだけだつた。

だから、さっさと帰つてもよかつたのだが……。

主人公、思う。

ここでの生活は快適だ。最大限に尊重されている自覚がある。

……でも、なんだか居心地が悪い。

大切に扱われているとわかつてゐるからこそ、こんな風に思つてしまふ事自体が、なん  
だか申し訳なくなる。

正直に言えれば、淋しいし、退屈だし……ここで何をしていたらしいのか、よくわからな  
いのだ。

——いや、本読もう。本。明日の事は明日考える。

主人公、気を取り直そうと、本のページをめくる。

ここに来る途中、古書店で買った小説だ。

主人公のお気に入りの作家の本である。

だが、その作家の主な活動時期は十年ほど前と、少し古い。

今も活動しているらしいが、以前と比べ、執筆ペースはすっかり落ちてしまつたのだ。  
ゆえに、全盛期の作品は少し手に入れづらくなつてゐる。

図書館にも、置いてある本と置いてない本がある位だ。

だから、主人公は偶然見つけたこの一冊を、大切に読んでいるのである。ネット書店が使えれば、旧作は一気に揃えられるだろう。

だが、それは両親に頼まなくてはいけないので手間だ。

それに、それができない理由は他にもある。

今はそれはまあ、いいとして……。

主人公、すでに何度も読んだ本をまた読みながら、あの後の弥映を思い出す。

あれから主人公は、弥映をこの民宿まで連れて行つた。

そして、伯父伯母に弥映を紹介し、ひとまず今晚弥映はここに泊まる事になつたのだった。

その時の弥映はとても良かつた。

直前まで彼女に振り回され、乱れに乱れていた主人公の気持ちを、すとんと、一気に落ち着かせるほどのものだつたのである。

主人公は当初『弥映が二人に無礼な態度を取つたらどうしようか?』と、内心ヒヤヒヤしていた。

だが、それは杞憂だつた。

実際の弥映は非常に礼儀正しく、丁寧で。

主人公と話していた時の、くだけた感じは完全に消していく。

いかにも『大人の社会人女性』という感じで終始真っ当な応対をし、主人公はこれに、また訳もなくドキつとさせられたのだつた。

……ふん。

さつき仕事は『なんもしてない』『無職』って言つてたけど、あれも嘘っぽい。

だつて、あれは全然そんな感じのしない、きちんとした対応だつた。

きつと本当はただの夏休みなのに、適当に私をからかつたんだ。

……いや、これは穿ちすぎか。

冷静に考えて、お仕事を辞めたばかりつてところかな。

だから時間がてきて、変わつてるにもほどがある感じで、こんなところにきたのかな。

あんな綺麗な人が、一体何しに来たんだか……。

主人公、弥映の正体を推理しつつ、さらに先ほどの事を思い出す。

それだけではない。弥映は伯父伯母に対して、随分と主人公の事を褒めてくれた。

河原で実際に交わした会話はあんな感じだったのに、しつと笑顔で  
『本当に親切な方で。彼女のおかげでこちらへ来られました』  
『ご案内していただけて、とても助かりました』

なんて、目の前で言われたら……。

人の世話を焼く事が、もはや癖になつている主人公も、嬉しくならざるを得なかつた。  
それがまた、なんだか面白くないが。

……あと、雑誌の件は本当に秘密にしてくれたし。

空樹さんって、ちょっと適當な感じの人つて思つたけど……。案外きちんとしてるのか  
も。

いや、ダメダメ。あの人、美人だからつて絶対に調子乗つてる。  
ニコニコしてお願ひすれば、たいていの事は聞いてもらえると思つてそう。  
絶対そう絶対そう絶対そう。

主人公、らしくもなく、根拠のない推察を続ける。  
何というか『そういう事』にしておきたいのだ。

でないと、自分は弥映の言葉や態度を真に受けてしまう。  
ではなぜ、真に受けてはいけないのかというと——……。

※音声ここから※

SE1　主人公が小説をめくる音

【最初から最後まで流す】

5秒ほど沈黙。

SE2　弥映が木の扉をノックする音

【最初から最後まで流す】

と、そこで、ふいに部屋の扉がノックされた。

※ドア越しで声がこもる。これは、編集でこの効果にする

●中央 少し遠い

〔優しく、少し楽しそうに〕

ね。入つていい？ まだ起きてるでしょ？」

弥映だ。

主人公、驚く。

正直なところ、案内したら、自分達の関係はもうおしまいだらうと思つていたのだ。  
主人公は、弥映が自分のような年下の少女に、必要以上の関心を抱くとは思つていなし。  
たとえこちらがいくら弥映の事を気になつていたとしても……もう、向こうからは、あ  
いさつ程度しかしてこないだらう。そう考えていたのだ。  
なのにまさか、また彼女の方から接触してくるとは……。

一体、何の用事だらう？

あ、サンダルの事とか？ ……それなら、あげるつて言つたのに。

主人公、不思議に思いつつも本を置き、布団から起き上がつて扉を開ける。

S E 3　主人公が布団から起き上がる音

【最初から最後まで流す】

SE4　主人公がドアへ向かって歩いて行く音

【最初から最後まで流す】

SE5　主人公がドアを開ける音

【最初から最後まで流す】

（主人公）

「こんばんは……？」

●中央

〔嬉しそうに、ホツとした声で〕

こんばんは。

〔少し間をあけてから。嬉しそうに、ホツとした声で〕

よかつたあ。部屋間違つてなくて。

〔布団の上の本に気づいて。まだ何の本なのかはわかつていない〕

本読んでたんだ。今大丈夫？』

（主人公）

「……いい、ですけど」

主人公、内心ドキドキしながら頷く。  
すでにお風呂に入つたのだろうか。弥映からはとてもいい匂いがする。

●中央

「声は落ち着いているが嬉しそうに」

やつたあ。

ほんとにあんたも民宿の中に泊まってるんだね」

主人公が了承するとともに、弥映はスリッパで部屋の中に入つてくる。  
サンダルは手に持つていない。

という事は……サンダルの件で来た訳ではなさそうである。

S E 6 弥映が部屋の中に入つてくる足音

【最初から最後まで流す】

●中央

「少し間をあけてから。民宿のHPを見たことを話す」

さつきスマホでこここのサイト見たけど。

この部屋つて、一番立派な客室じやない？

大事にされてるんだね」

ふーん……。

どうやら、弥映は観察眼も悪くないらしい。

先ほどの、四人での短いやりとりと、主人公の待遇を見て、主人公と伯父伯母の関係を理解したようだ。

確かに大事にされている。大事にされすぎているくらいだ。

（主人公）

「……はい。『その方が気を遣わないだろう』って伯父さんと伯母さんが。

だから、基本はここで好きに過ごさせてもらっています。

ご飯は一緒に食べています」

●中央

「【自分の認識があつてているか確かめようと、主人公の言つた内容を復唱していく】  
へえ。

じやあ、普段はお客様みたいにこの部屋で自由に過ごして。  
ご飯の時は伯父さん達と一緒に食べてるんだ。

VIP（ビップ）だね」

〈主人公〉

「はい。そんな感じです。

空樹（うつろぎ）さんは、どちらの部屋に泊まっているんですか？」

主人公、本当はどこに泊まっているか知つていて、あえて聞く。

『自分は弥映の宿泊室を知らない』。

そういう事にしておきたいからである。

●中央

【隣の部屋に泊まる事を伝える】

あ。あたしはね。隣に泊まつてる。その方がいいだろうって言つてくれて。

【主人公が自分を名字で呼ぶのが気になる】

て い う か 弥 映 （ や え ） で い い よ。

敬 語 も 使 わ な く て い い し。

『こ こ に お 世 話 に な つ て る 身』 つ て 意 味 で は 対 等 で し ょ ？

…… へえ。 この 人、 ずいぶんと 変わつた 事 を 言 う ん だ な。

主 人 公、 きよとん と す る。

確 か に 自 分 達 は、 そ の 点 で は 対 等 だ。

だ が、 弥 映 の 方 が、 主 人 公 よ り も ず つ と 年 上 だ ろ う。

そ ん な 目 上 の 相 手 に、 た め 口 で 話 せ る ほ ど、 主 人 公 は 礼 儀 知 ら ず で は な い の だ が ……。

彼 女 が そ れ を 望 む な ら、 そ う も い か な い か。

〈主 人 公〉

「 …… じ ゃ あ、 弥 映 さ ん ？」

● 中 央

〔少しわざとらしく、 残念そ う な 声 を 出 す〕

『弥映さん』？ なんか固くない？

だが、弥映はこの呼び方でも気に入らないようだ。  
不満そうにしている。

参った。呼び捨てなんて考えられないから、それならもう選択肢は一つしかないが  
……。

——それじやあまるで、同年代の友人みたいじやないか。

〈主人公〉

「じゃあ弥映ちゃん」

●中央

〔『ちゃん』づけが少し意外で驚く〕

『弥映ちゃん』？

主人公が照れ臭そうに早口で言うと、一気に弥映の顔が明るくなる。  
『きやはつ』と、少女のように笑う。

主人公はそれが恥ずかしい。

●中央

「だが、それが主人公らしいような気がして嬉しくなる」  
ふふ！

【嬉しくてはしゃぐ。『はーい』は手を挙げて話しているイメージ】  
はーい。弥映ちゃんです。

あのね。あたし、お菓子持ってきたんだよ。食べて

〈主人公〉

「えつ？」

●中央

「いたずらっぽく」

お礼

SE7 弥映が主人公にお菓子の入った袋を見せる音

【最初から最後まで流す】

なるほど。そういう事か。

そのために、来てくれたんだ。正直、嬉しい。

……かといって、あつさり認めるつもりはないけど。

主人公、弥映の目的が見えてきて、合点がいく。

同時に『お礼』という言葉についても、まだ他に思い当たる節があるものの、しらばつ  
くれる。

やつぱり恥ずかしいのだ。

下心があるとは思われたくない。そんなものはないからだ。

第一、こちらはもう、挨拶しかしないだろうと思つていたのだ。

そんな相手に『どうにかして仲良くなりたい』なんて下心を持つわけがないじゃないか。

……でも、そう思われてもおかしくない事をしたから、恥ずかしい。

弥映にはすでに、すべてバレているようだが……。

それでも知らないふりをしたい。

「『すべてお見通し』という感じで、本題に入る」

ねえ。なんかあたし。

伯父さんと伯母さんの中では『あんたを変質者から助けた親切な人』つてなつててびつくりしたんだけど

〈主人公〉

「え？」

●中央

「少しにやにやと。主人公がシラを切つている事はわかっている」

よくわかんないけど、そういう出会い方した事になつてるらしいよ？

靴もその時壊したんだって」

〈主人公〉

「へえ……何でだろう。何か勘違いしたのかな？」

……もちろんこれは、主人公が伯父伯母に、事実とは違う物語をでっち上げた結果だ。

主人公は正直なところ、弥映の靴の事が気になつた。

あまりに痛々しく、心配な気持ちになつた。

というか……あんな格好の若い女性が一人で歩いていたら、あまりにも危険だと思ったのだ。

おかしな人に目を付けられかねないし、そうなつたところでうまく逃げられない。  
少しでも早く安全な場所へ行くべきだと思ったのだ。

そこで、主人公は逆にこれを利用する事にした。

弥映を『主人公を変質者から助けた結果靴を壊し、導かれるままこの民宿にやつてきた女性』にすれば、伯父伯母はきっと手厚く扱ってくれる。

食事や、部屋を与える時に、少し色を付けてくれるだろう。そう思つたのだ。

まさか、隣の部屋に宿泊させるとまでは思つていなかつたが……。

### ●中央

「少し間をあけてから。

穏やかに落ち着いて、はつきりと確信があつて言う】

泊まる部屋の事も。あんたが色々かけあつてくれたんでしょ?  
【にやにやと嬉しそうに。犯人に証拠をちらつかせるかのように】

隣、すごい立派で。なんか不思議な力が働いてる気がするんだよなあ。  
【少し間をあけてから。少しぜ<sub>真</sub>面目なトーンになつて】  
もしかして。心配してくれたの?』

〈主人公〉

「……さあ? 何の事だか」

●中央

「あくまで知らないふりをする主人公が可愛い】

ふふ。

【とても嬉しいが、少し申し訳なくもある感じで。  
なお、これに関しては、本当に転んで折っただけ】  
靴はマジに転んで折つただけだから大丈夫なのに。

【少し間をあけてから。優しく】

ほんとに優しいね。もてるでしょ。学校でも

〈主人公〉

「別に、そういうわけじゃ……。

そうするのがいいって、思つただけですから。

あと、別に、モテないです。学校じやお母さんキャラとか言われてるし』

主人公、なぜか顔が熱くなつて、むやみやたらに、そして語気を強めに『モテない』を強調する。

それから、『別にそういうわけじや』と言つてしまつた事で、本来反論すべきだつたところを、結局肯定してしまつたのに気づく。

弥映もそれをわかつているようだが、もう追及してこない。  
さつきから負けっぱなしである。

### ●中央

「主人公の言つている事がほほえましくて可愛い」

あはは、お母さんキャラ？

【心から言う。つまり褒める。それから『なるほど！ 確かにわかるかも』と思つてゐる】

それ、相当愛されてるよ。

【少し間をあけてから。少し真面目なトーンになつて】

ありがとう。あんたに会えて、あたしほんとにラツキーだつたな

（主人公）

「あっ……。それは、どうも……」

●中央

「少し間をあけてから。照れ笑いして」

「へへ。それだけ。それが言いたくて。

邪魔してごめんね。

これは全部あげる」

S E 8 弥映が主人公にお菓子の入った袋を渡す音  
【最初から最後まで流す】

弥映、そこまで話し終えると、お菓子の入った袋を主人公に押し付ける。

これでは、先ほどと逆の構図である。

しかもそのまま、部屋を去ろうとするものだから、主人公は弥映の行動が意外で……。  
衝動的にたずねてしまつた。

だつて思つたのだ。『まだ戻つてほしくない』と。

〈主人公〉

「え？ もう戻っちゃうんですか？」

●中央

【きよとんとする。引き止められたのが意外で】  
え？ だつて、本読んでたんじゃないの？】

〈主人公〉

「いいよ。……それは、いつでも、読めますし」

後になつて、主人公は、よくこの時の事を思い出す。

この時、自分はなぜ弥映を引き止めたのか。

『気になりはする』し『親切にすべきだ』とは思うが、一緒にいると、自分の心をざわつかせ、落ち着かない気持ちにさせる弥映を、どうして引き止めたのか。

〈主人公〉

「それより。一緒に、食べ、よう?」

なぜ、ポリシーに反して敬語をやめてまで、一緒にいようとしたのか……。

●中央

「呼び止められたのが意外できよとんとする」

いいの? 居ても

△主人公

「……うん。 よかつたら、ですけど」

認めたくない話だが。それは弥映の言葉を借りれば『勘』だつた。

弥映の事を何も知らないのに、その姿を見ただけで惹かれた。

なんだか、この人の事をもつと知りたいような、そんな衝動にかられた。

もしこれについて『見た目が気に入ったのか』『顔が好みだったのか』と聞かれたら、主人公には、否定のしようがない。

でも、見た目から内面を感じる事はないだろうか。

たとえば、表情とか、立ち居振る舞いとか、声とか話し方とか。

そういつたところから人柄を感じて、漠然と、でも強く惹かれる事はないだろうか？

一方、弥映はきよとんとしている。

おそらくだが、主人公に好かれているとは思っていなかつたのかもしれない。だけど……たつた今、それは違つていたらしいと理解してくれたのだろう。

とても嬉しそうに顔をほころばせた。

●中央

「すごく嬉しそうに」

じやあ。居る。

〔少し間をあけてから〕

ふふ。ありがと！」

〈主人公〉

「……じやあ、どうぞ。ここ座つて」

●中央

「とても嬉しそうに  
お邪魔します」

SE9 弥映が部屋の奥へ進む足音

【最初から最後まで流す】

SE10 弥映が指定された場所へ座る音

【最初から最後まで流す】

こうして主人公は、弥映を自分の部屋に招いた。

それから意外にも、許可をして初めて踏み込んでくる弥映の事を、なんだか可愛らしく思つた。

そうだ。この人はまるで吸血鬼みたいだ。

吸血鬼は家主の許可を得ないと、人の家には入れない。  
だから訪問の際は、必ず『入つていい?』と聞いてくるのだ。

弥映ちゃんは自分を人間だと言つていたけれど……正直なところ、人じやないと言われた方がしつくりくる位、彼女はきれいで……。

私と同じ位、この田舎の民宿で浮いていた。

〈主人公〉

「どれ食べる？」

●中央

「少し緊張した様子で】

あ。

【嬉しい。だが、もらえるとは思っていなかつた】

じゃあ、アイス頂戴】

〈主人公〉

「じゃあ、私もそうしようつと」

S E 11　主人公がお菓子の袋からお菓子を取り出す音

【最初から最後まで流す】

主人公、弥映にアイスを渡そうと袋の中を改めて見て、驚く。

袋の中には、随分と色々入っていたからだ。

主人公の好みがわからないから、偏りのないようを選んで買ってくれたのだろうか。これでは『アイス』というだけで、二つも選択肢がある。

お菓子選びに苦心する弥映の事を想像したら、思わず笑みがこぼれてしまう。

主人公、袋を開いて、弥映が好きな方のアイスをとれるようにする。

弥映は小さく頭を下げる、その中から、赤い袋に入った方のアイスバーを取った。

SE12 弥映がアイスを袋から取り出す音

【最初から最後まで流す】

●中央

「【アイスを食べる】※食べるふりでOKです※  
もぐもぐもぐ……。

【すごく嬉しそうに】

ふふ。冷たい。

【少し間をあけてから。主人公の顔を見てニコつとする】

おいしいね。あたし、アイスはナツツが入ってるのが好き。

〔少しおずおずと。主人公好みの買い物ができたか、少し不安  
ね。あんたの好きなのはあつた?  
なんか色々買っちゃったんだけど〕

〈主人公〉

「うん。実はこのアイスモナカ、ヘビロテしてる」

主人公、もう一つのアイスである、バニラ味のモナカを食べながら頷く。

嘘ではなく、本当に好きなアイスだ。おいしくて、思わず頬が緩む。

だけど、それを見た弥映の方が、もっと嬉しそうにするので、ドキドキする。

●中央

「【すごく嬉しくて、声のテンションが上がる】

ほんと? よかつたあ」

……だから、恥ずかしくて、つい目をそらしてしまった。

〈主人公〉

「これは、そこのコンビニで？」

●中央

「そう。伯母さん達に場所聞いて、そこのコンビニで買った」

〈主人公〉

「ですよね。この辺、この時間までやつてるのはあそこしかないし。  
わざわざありがとうございます」

●中央

「とても嬉しい」

とんでもない。喜んでくれて嬉しいよ。

【少し間をあけてから。ここで思い出したよう。】

自分の勘が当たっていたので、ひそかに嬉しい】

そうだ。あんたって、やっぱりこの辺の子じやなかつたんだね。

今ご両親海外で、夏休みはここに預けられてるんだって？」

〈主人公〉

「あれ。なんで知ってるんですか？」

主人公、アイスを口に入れながらまた驚く。  
別に知られても構わない事だが、情報が早い。

### ●中央

「伯母さん達が教えてくれた。

【内心少し慌てて。

根掘り葉掘り聞いて回ったやつだと思われたくない】  
あ、そんな深くは聞いてないよ。

【少し間をあけてから。

勝手に情報を得た事は申し訳なく思っている。

だが、やはり予想が当たっていた事は嬉しい。なので、言わずにはいられない】  
やっぱり勘が当たつたなとは思つたけど

……うん？ 勘？ 一体どういう事だろう。

### 〈主人公〉

「それはまたどうして」

●中央

「少し思案して。根拠を言語化していく。

『勘』とは言っているが、実際は『観察眼』の方が正しい表現である】  
んー。だつて」

弥彌、ここで主人公の顔をニコっとのぞき見ると、それから、下に向けて広げた両手の平を、主人公へ向ける。

つまり『あなたはこういった容姿をされているので……』と言いたいようだ。  
そして、首をかしげて言う。

●中央

「少し間をあけてから。適切な表現を見つける】

都会的？ ビジュアルが。

だから、旅行とかで来てる子かなつて」

主人公、その言葉で理解する。

……なるほど。

勘つてよりは、こちらを観察した結果、そう思つたつて事か。

空樹さ……弥映ちゃんは、つくづく、こちらの事をよく見ている。

主人公、嬉しいような、悔しいような、複雑な気持ちに襲われ、それからやはり『嬉しい』と思う。

自分の事を正しく理解してくれる人がいるというのは、なんだかそわそわして……それから、ドキドキするものだ。

〈主人公〉

「むむむ……。正解ですけど」

●中央

〔正解して嬉しい〕

あは。やつたあ。

〔少し自慢げに。当たつたので誇らしい〕

あたしね、何（なん）となく『こうじやないかな』と思つた事、結構当たるんだよね。

【嬉しくて、少し声のテンションが上がる】

※無垢で可愛らしい印象で。

『嘘っぽい』『こちらを騙そうとしている』風に聞こえないようにお願いします※  
あんたの事もね！ 一目見ただけで、絶対いい子だと思つたの』

〈主人公〉

「ふうん……」

弥映、嬉しそうに主人公の顔を覗き込んで言う。

上目づかいでこちらを見上げて、まるで少女のようだ。

これでは、どちらが年上なのかよくわからない。

SE13 弥映が主人公を覗き込む音

【最初から最後まで流す】

ここで、弥映の身体が、自然に少し近づく。声の距離も近づく。

●中央 至近距離

〔嬉しい。『これも』とは『主人公はいい子である』という事をさしている〕  
「これも正解だつたでしょ？」

〈主人公〉

「……まあ、そうかも？」

主人公、ますます恥ずかしくなる。

なんだか、随分と、人の事をほめる人だ。

これ以上私をいい気分にさせたつて、もう、融通してあげられる事なんてないんだけど。

……だからもし、この人がそれを期待しているなら、私は『間違いだ』って言いたい。

でも、この人は、別にそういうつもりで言つているわけではないような気もする。

だつて、ただ本当に……自分のインスピレーションが正しくて、喜んでいるような顔を  
してる。

勝手にうがつた見方をして、警戒している私の方が、よほど悪人に思えるみたいに  
……。

● 中央 至近距離

「嬉しい。照れ笑いして」

へへ。

【少し間をあけてから】

……あれ、この本

〈主人公〉

「知ってるの？」

そこで、急に話題が違う方へ向かう。

弥映が、布団の上に置いたままの本に関心を持ったのだ。

主人公が思うに……。

失礼ではあるが、弥映は読書しそうなタイプには見えなかつた。

小説や書店、図書館にはちつとも縁がなくて、いつも人と楽しく会つて遊んでいて、  
り上がつて……みたいな。

そんな人物だとばかり思つていたのだが……。

盛

SE14 弥映が本を手に取る音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「[ごく自然に]

うん。あたしも読んだ事ある」

〈主人公〉

「えっ？」

だが、それは主人公の誤った思い込みであつたらしい。

●中央 至近距離

「嬉しい。主人公と趣味が合うらしいと知つてテンションが上がる」

懐かしいなあ。結構古い本だよね。

【声のテンションは全く変わらない。

だが、ここで本の内容を思い出す。

当たり障りのない話にとどめて、話を変えようと考える】

この人の小説、いつも表紙の写真が綺麗だよね。

あたしも、あんたよりちょっと上位（うえくらいい）の年の時に、ジャケ買（が）いしてはまつたんだ

弥映は意外なほど、この本についてよく知っていた。

その目は懐かしそうに表紙を見つめ、手は、ソフトカバーを優しく撫でている。それを見て主人公は、弥映が本当の事を言っているのだと理解した。

（主人公）

「そうなんですか！」

弥映さ……弥映ちゃんも、この作家さんが好きな、の？」

●中央　至近距離

「声のテンションは全く変わらない。楽しく会話している。

だが、内心『この話続けていいの？　振ったのは自分だけど……』と思っている。

ひとまず、主人公があまり恥ずかしい思いをしないように、自分も割と熱心な読者だった事を伝える】

うん。好き。この人が出してる本、大体読んだと思う」

だが、主人公は、この時弥映の表情が、少しだけひきつっている事には気づいていない。

何せ十年前の本と、その頃に流行っていた作家なのだ。

誰かと語り合いたいほど好きなのに、ずっと読者仲間がいなかつた。

過去に書かれたレビューを、インターネットで読む事は出来た。だが、リアルタイムで読んでいる仲間、あるいはリアル元読者は、今日まで見つけられなかつたのである。  
だから、つい興奮して、話を進めてしまう。

### 〈主人公〉

「実は私もファンで！」

この人の本、全部読みたいって思つてゐんです。

でもおっしゃる通り、ちょっと古い本が多いので、手に入りにくくて……。

あの、弥映ちゃんはこの作家さんの本で特にどの本が」

### ● 中央 至近距離

「主人公が可愛くて笑顔になる。

相変わらず、声のテンションは全く変わらず、楽しく会話している。

正直、この話をもつと聞きたい。読書の話がしたいと思つてゐる。  
そうなんだ。

【少しだけからかうように。

これ以上は話がまづい方向に行きそうである。

だが、主人公がそれに気づいていないのを心配して、ストップをかける  
でもいいの？】

〔主人公〕

「へ？」

●中央　至近距離

〔少し楽しそうに〕

この話掘り下げる。

〔からかいたくはあるが、主人公を傷つけたくない〕

振ったあたしが言うのもアレだけど

〔主人公〕

「えつと……あ」

ここで、主人公はようやく、自らの過ちに気づく。

自分はすっかり盛り上がっていた。

だが、そんな自分を、弥映がちょっと困ったように、でも気遣うように見ていた事で  
……。やつと事態を把握したのだ。

そうだった。この人の本は、ヤングアダルト小説として人気を博したが——……。

### ● 中央　至近距離

「できるだけ何でもない事のように言う

この人の本って、パツと見おしやれだけど、どれもエロいよね。

【あくまで、何でもない事のように言う】

特にこれは相当どぎつい方だし】

〈主人公〉

「あつ……あつ……あつ……」

ああ。私つてば、また……！

これじやあ、またからかわれる……！

主人公、恥ずかしさでおかしくなりそうになる。

興奮のあまり、基本的な事をすっかり忘れてしまつていた。

そうだ。この人の本は、相當にいやらしい。

なぜだか知らないが、サービスか何かなのか。とにかく、どの本にも、必ず性描写がある。親に『ネット書店で注文して』と頼めないのも、うつかりあらすじなど読まれようなら、大変だからだ。

だから、一人でこつそり読んでいた。お気に入りの性描写を繰り返し目でたどりながら、『インターネット上はともかく、この話をリアルに誰かとするのは、きっと難しいだろう』と思つていたのだ。

なのに……。

なんでこんなにあつさり、好きな事をばらしちゃつたんだろう。

恥ずかしい。恥ずかしい恥ずかしい。

雑誌の件もあるし、これじや絶対、エロい事ばっかり考えてるバカな子だと思われる……！

一方弥映は、真っ赤になつている主人公を見ているうち、思わず笑顔になつてきた。  
お堅そうでいて、実際は性の話題に興味津々な主人公の事が、ますます可愛く感じられてきたのだ。

### ●中央　至近距離

「主人公が可愛くて、思わず笑つてしまふ

ふふつ♥

【少し間をあけてから。少し呆れつつも優しくからかう。

『もおあんたってさあ』は『もお、あんたってさあ』をつなげて言う  
もおあんたってさあ。すつごい眞面目でお堅そうなのに。

【優しくからかう。思わずほほえましくなつてしまふ】

実はやらしい事ばつか考へてるでしょ。

【少し間をあけてから。『そんなの当たり前だ』という感じで。

主人公をフォローしたい】

でも女もあるよね。普通に性欲。

【河原の件をさしてからかう】

まあ、あんま外ではバラさない方がいいけどね】

（主人公）

「え……？」

主人公、弥映の言葉が意外で驚く。

何せ二回目だ。一日のうちに二回も、自分は性的な本を見ているところを見られたのだ。いよいよしつこくいじめられたり、笑われたりするのだとばかり思っていたのである。

——でも、そうじやなかつた。

それどころか、何の問題もないみたいに受け入れられて、心配までされている気がするのだが……。

### ● 中央　至近距離

「きよとんと補足して。主人公が話を理解していないようなので。

『ゆつた』は『言つた』の意味

ゆつたじやん。おかしな人が声かけてきたら大変だよつて」

（主人公）

「それだけ？」

だから、それが信じられなくて、つい追及してしまう。  
でも……。

### ●中央　至近距離

「【普通に頷く。なぜ『それだけ?』と質問されるのかわからない】

うん。それだけ。

【少し考えてから。主人公が、『人前でアダルトな本を読むリスクはそれだけか?』と  
質問しているのかと勘違いしている】

後はまあ、信頼できる人とならいいんじゃない?

そういう話（はなし）しても

### 〈主人公〉

「本当にそれだけ!?

### ●中央　至近距離

「【『どうしてそんなにしつこく確認するんだ!』という感じで】

※大きな声にはならないようにお願いします※  
ほんとにそれだけだつてば!

そう。実際問題、弥映は本当にそれ以上の事を考えていなかつた。

主人公が深読みをしすぎていただけで『本当にそれだけ』だつたのである。

だから、疑り深くて、警戒心の強い主人公も、さすがに理解していくる。

もしかするとこの人は、発言にいちいち含みがあるようで、実際はちつともそうじやなくて。

いつも思つたまま、感じているままを、素直に、他意なく話しているだけで。

それを疑わしく思うのは、自分の心がひねくれているだけなのかもしれない——……と。

こうして、主人公がようやく弥映の人柄を理解しかけた中、当の弥映は、ここでようやく主人公がしつこく『本当に?』と聞いてきた理由を理解していた。

### ● 中央　至近距離

「【ここでようやく『本当にそれだけ?』という言葉の意味を理解する】  
あ、なるほどね?」

【にやにやとからかう】

わかつた。

バレたら何（なん）かされると思つたんだ

〈主人公〉

「う……」

●中央 至近距離

【笑いながら。『そんなの当たり前だ』という感じで】

しないよ。

【これに関する根拠を述べ、主人公を安心させようと思つていて  
ていうかあたしも読者だし。

仮にエロいのが罪（つみ）なら、あたし達同罪（どうざい）じやない？】

〈主人公〉

「あ……。そつ、か。なるほど」

主人公、その言葉で、ストンと腑に落ちる。

確かにそうだ。

ていうか、だから、あえて弥映ちゃんは『自分も熱心な読者だ』って強調してくれたんだろうか。

……ああ。私はこの人の事を、隙あらばこちらにマウントを取りに来て、いかにも小馬鹿にして、年下扱いしてきそうなタイプだと思いこんでいた。

リアルに嫌な目に遭つた事なんかない癖に、ファイクションの世界で見た嫌な感じの女人達だけを見て、現実の女人の事を判断して。

『弥映ちゃんみたいに派手な見た目の、大人の女人なんて。きっとみんな、私つまり、えつちな事が気になつてしまふが年下を、バカにするんだろう……』って、思い込んでいた。

……だけど、それは全然違つた。

ファイクションを見ただけで現実を理解した気になつて、間違つた解釈をしていた自分が、すごく恥ずかしい。

でも、それでもこの人は、怒らないでいてくれるんだ……。

これによつて、主人公の心は大きく動く。

主人公はこう見えてなかなかの厨二病で、理不尽に押さえつけられたり、むやみに子ども扱いされたりすると、激しく反抗したくなるほうだ。熱くなつてレスバをしてしまう。

でも、弥映はそうしない事がわかつた。

弥映は年上らしくない代わりに、こちらを年下扱いもしない。

小さな女の子のように無防備な笑顔を見せたかと思つたら、急に、そのくせ自然に、大人の女性としてこちらを肯定してくれる。

その度に、主人公の心は乱される。

そうだ。弥映と話していると、主人公は自分の年齢を忘れてしまいそうになる。

それは、すごく不思議で、未知の感覚だ。

でも、すごく自分らしくいられるような気もする。

弥映は主人公に『あなたはこうあるべきだ』と、役割を押し付けてこないからだ。

正直言つて、それが心地いい。

私、実はこの人の事、好きかもしれない……。

〈主人公〉

「そつか……」

●中央　至近距離

〔ホツとしている主人公が可愛い〕

あはは。めっちゃホツとしてる。

〔声音が優しく変わり、主人公をドキッとさせる〕

可愛いね。

〔元の声音に戻る。『多分、それ』をくつづけて言う〕

さつきもてないって言つてたけど。多分それ気付いてないだけだよ」

〈主人公〉

「え？」

だがここで、話はさらに意外な方向へ転んだ。

主人公はこれについて行けず、きょとんと弥映を見上げる。

そして弥映は、まったく悪びれず、しがつと、また主人公を驚かせた。

●中央　至近距離

「しれっと。あっさり言う

だつてあたし、あんたみたいな人好きだもん」

〈主人公〉

「……っ！ それはどういう……」

●中央 至近距離

「平然と。とても『泣きそうだった』とは思えない口調で、先ほどの事を思い出して話す  
さつきさあ。ほんとは地味に泣きそうだったんだよね。

道わからぬいし足痛いし。

【少し間をあけてから。嬉しそうに】

でも、あんたが助けてくれた。ほんとに神様かと思つた。

【※マークまで、口調は自然だが、心から尊敬して言つている】

普通にすごいつて思つたんだ。

あんな風に、自然に人に優しくできる事。

しかも、会つたばつかの怪しい女に。 ※

【少し間をあけてから】

……だから

その時、弥映の身体がもう一步近づいて、主人公の視界がかげつた。主人公は少し薄暗くなつた部屋で、弥映の顔を見つめる事しかできない。その顔を、言葉を。素直に好きだと思つたからだ。

それから……すごく、いい匂いがする。

### ●中央　至近距離

「小さく微笑み、ほんの少し含みを持たせて」

気が変わつた。やっぱり何（なん）かしてみるのもいいかも

S E 1 5 弥映が主人公に近づく音  
【最初から最後まで流す】

そして弥映は、そのまま主人公の左耳に顔を寄せて、ささやく。

主人公は突然の事に、何も考えられずにいる。

●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「[ぼそっと。まつたく悪びれずに】

しょつか。本に載つてゐみたいな事】※

弥映、そう言うと、一度主人公の耳元から離れ、髪の毛を耳にかける。  
それから、布団に置かれた本を見下ろし、目を細めて笑つた。

●中央　至近距離

「……だつて」

弥映の言葉が一度止まる。

だから、まだ、これからなんと言うかは確定していない。

だけど主人公は、弥映の次の言葉を、すでに察していた。

なぜなら、その本に書かれているのは。

それから、主人公が河原で見ていたのは……。

●中央　至近距離

【淡々と事実を伝える】

ここに書いてあるのも。あんたが川原で夢中になつて見てたのも……」

弥映の身体が、もう一度近づく。

主人公は逃げられない。

これから何と言われるかわかつていて、それでも弥映から離れられない。

●左ささやき※マークのセリフまでささやく

「[淡々と。からかつたり、笑つて いるような感じにはならないようにする]

女同士のセツクスでしょ?」※

ここでフェードアウトして終了。